

昨年10月に、2019年症例の院内がん登録データを国立がん研究センターに提出した。

総数は2,588件で、2018年症例に比べ255件と例年になく増加している。

そこで、その背景を探るため、カルテの閲覧をした中から、他施設紹介の増加、内視鏡センター開設など、いくつかの仮説を立て統計を分析した。

原発部位別統計では、2018年症例と比較し、大腸83件、胃29件、食道22件、膵臓63件、消化器系の部位が大幅に増加している。悪性リンパ腫も41件で、昨年より増加した。また初回治療をどの施設で開始、実施したかを判断する治療施設別統計では、初回治療終了後の治療、経過観察での紹介件数が昨年より倍増している。これらの統計より、他院の診療科閉鎖や医師不在による他院からの紹介が増加したことが要因であるとわかった。

2020年症例はコロナ禍で総数が減少することは明らかに予測できる。がん治療に影響を及ぼす結果となるのか、今後も院内がん登録を実施しながら統計分析を試みたい。

12. 膀胱全摘・回腸導管造設術後に非閉塞性腸管虚血症を発症し、緊急開腹手術により救命した患者の術後離開創の管理

感染管理室

北原 邦彦

看護部

鈴木 美花 大塚有香子

泌尿器科

西川 昌友

外科

河合 毅

形成外科

高田 温行 最初 裕司

【はじめに】

今回、膀胱全摘・回腸導管造設術後に非閉塞性腸管虚血症を発症し、緊急開腹手術により救

命した患者の離開創に対し、多職種が協働し創傷ケアを行い治療したので報告する。

【症例】

60代後半 男性 既往歴 なし

膀胱癌で膀胱全摘・回腸導管造設術を受けた。術後2日目に非閉塞性腸管虚血症を発症し、救命のため小腸広範囲切除・左半結腸切除・横行結腸ストーマ造設・尿管皮膚瘻造設術を受けた。術後創感染により、回腸導管の閉鎖創および腹部正中創が離開した。医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働して創傷ケアを行い、感染制御できた。形成外科にコンサルテーションし、閉鎖陰圧療法を開始し、肉芽形成は良好であった。しかしながら、広範囲の皮膚欠損が残存するため全層植皮術を行い、創閉鎖した。

【考察】

TIME理論に基づいた創傷ケアを医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働して行い、早期に創閉鎖することができた。

13. コロナ禍における感染拡大防止と学修機会の確保等の取り組み

姫路赤十字看護専門学校

藤田美佐子 山田 道代

内海 尚美 松井 里美

神戸真由美 藤元由起子

中林 朝香 小野 真弓

石谷 尚美 木本菜見子

森下 裕子 坂本佳代子

昨年度末から新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、緊急事態宣言や学校の臨時休業要請などを受け、本校でも学生が数か月間、通常登校できない状況にあった。その間も、登校できない学生に対しても質の高い学修機会を確保する必要があり、課題レポートや積極的なICTの活用による家庭学習の支援が求められた。

そのため、本校では4月～5月の臨時休業の間に、学生の通信環境の確認と情報管理課職員との協力のもとでオンライン（以下Webとする）